東京女子高等師範学校の記念文庫

Memorial Library of the Tokyo Women's Higher Normal School

奥田 環 (Tamaki OKUDA)
お茶の水女子大学 文教育学部 人間社会科学科

はじめに

「文庫」には本来「書物を納めおく場、書庫」という意味があるが、本稿では、あるまとまった蔵書群を指し、東京女子高等師範学校(以下、東京女高師)の歴史の中で、大きな式典や行事をきっかけとして設置された記念文庫について解説する。

東京女子高等師範学校は、東京女子師範学校として1875(明治8)年11月にお茶の水の地(現文京区湯島1丁目、東京医科歯科大学所在地)に開校した。開校当初より「書籍縦覧室」が設置されている。所蔵図書は年々増加し、1890(明治23)年には、従来生徒の専用であった「図書閲覧室」を整備し、職員も利用できるように改めて「図書閲覧心得」を定め、翌年「図書室仮規則」を制定した[1]。職員・生徒の研究教育活動を補佐する図書室は一貫して存在し、拡充されていくが、「文庫」はその時々の行事や世相と深い関わりがあり、記念として設置された後、図書室の蔵書として活用されていくことになる。

記念文庫の例

(1) 創立三十年紀(ママ)念文庫

1904(明治37)年11月29日、開校三十周年記念式が挙行される。これは東京女高師が開校記念式を挙げた最初のもので、以後この日を開校記念日と定め、毎年祝賀式を挙げることとなる[2]。当日の式次第及び式場見取り図や参加者については、東京女高師庶務掛による「日誌」に詳しい[3]。ここに「当日女子高等師範学校卒業生有志四百八十名ヨリ左ノ通リ寄贈セリ、書籍并書籍函料、金五百四十円也」とあって、卒業生有志から書籍購入費用が寄贈されたことがわかる。これをもとに揃えられた蔵書が「創立三十年紀(ママ)念文庫」であると思われる。

1907(明治40)年5月に全国師範学校長会議が本校で開催された際に、校内見学が行われているが、参観順序を記した表を見ると、その中に「創立三十年紀(ママ)念文庫」がある[4]。当日は約60名の参加者が二手に分かれて、授業の様子と校内施設を巡覧した。授業は化学実験、物理実験、家事実習、図画、博物実験、裁縫、体操、遊戯で、校内施設は待賓室の「成績品一覧」即ち生徒作品の陳列を見て、地理標本室、歴史標本室、図書室、自習室、寄宿舎と、運動場まで含め、まんべんなく見学している。この「自習室」に「附 創立三十年紀(ママ)念文庫」と附記されている。

この時の自習室は、実は講堂のことである。1898(明治31)年に竣工した400畳敷きの講堂は、普段は生徒が寄宿舎から5分も歩いて通い、ここで勉強するという自習室であり、行事の際には机を隅へ片付けて使用するという場であった[5]。それは1911(明治44)年に東に隣接する東京高等師範学校が大塚に移転した際に、その土地・建物を女高師に移管して、校舎を改修し、寄宿舎にも自習室が整って、講堂と兼用する必要がなくなる時まで続いた。「創立三十年紀(ママ)念文庫」はこの自習室の一角に備え付けられていたのではないだろうか。

この後、「創立三十年紀(ママ)念文庫」は史料上に見出せない。1891(明治24)年の「図書室仮規則」は1911年に正式の規程となり、同年には図書掛も新設された[6]。この図書掛の職掌に「紀(ママ)念文庫ニ関スル事」が含まれており[7]、講堂として専用されるにあたり、「紀(ママ)念文庫」の蔵書は図書室又は書庫に移されたのではないかと考える。

(2) 寄宿舎の記念文庫

東京女高師は、1923(大正12)年9月の関東大震災で全焼し、お茶の水の仮校舎で過ごしながら、大塚の新校地(現文京区大塚2丁目、お茶の水女子大学所在地)へ段階的に移転をしていった。1929(昭和4)年10月には第一寄宿舎が竣工し、翌月に移転する。『六十年史』でこの新寄宿舎について解説する中で、「文庫」即ち読書室について触れている[8]。

Copyright 2010. Ochanomizu University. All right reserved.

それによると、「(寄宿舎には)自習室以外に読書室があつて、舎生は此の室を文庫と呼んでゐる。畏くも昭憲皇太后陛下の御下賜金によつて創められた記念文庫なのである。」とあり、この文庫の整理・保存その他一切の世話をする「文庫部委員」が置かれた。過去の蔵書は大震災で焼失しているので、ここでいう「昭憲皇太后の御下賜金による記念文庫」とは、現実の蔵書群を指すものではないはずだが、寄宿舎の読書室や蔵書を、震災前に遡って昭憲皇太后の下賜金により創設されたものと認識し、それ故にそれを「記念文庫」と称していたのである。ここでは、「文庫」という場が昭憲皇太后との関わりを偲ぶ空間として理解されていたことがうかがわれよう。

その後の寄宿舎読書室は、文学全集が揃うなど充実していた様子であるが、1945(昭和20)年5月の空襲で第一寄宿舎が全焼し、それらの図書も全て失われた[9]。

(3) 紀元二千六百年記念文庫

1940(昭和15)年2月、東京女高師では教官・事務官6名が「紀元二千六百年記念文庫設置ニ関スル実行委員」を命じられ、書記2名がその補助を命じられた[10]。同年は皇紀2600年の式典や記念行事が国家的に行われており、東京女高師もそれを記念して文庫を設けたのである。6月に「紀元二千六百年記念文庫」として、和書901冊が図書館のN部門(記念文庫)に納められた[11]。

それはお茶の水女子大学附属図書館に引き継がれ、現在も一括して保管されている。

(4) 大礼記念文庫

天皇の即位の礼・大嘗祭と一連の儀式を合わせて、「大礼」又は「大典」と称する。大正天皇と昭和天皇が即位した際には、東京女高師でも記念事業が実施されるとともに、「大礼記念文庫」が設けられた。次章以降で、それぞれの場合について詳述する。

大正天皇の大礼記念事業

(1) 記念事業としての文庫の創設

大正天皇の即位の礼は1915(大正4)年11月10日である。同年10月の『読売新聞』に、「御大典に際して女学校は」と題して、各女学校が予定する記念事業を調査した記事が載る[12]。跡見女学校、女子美術学校、千代田高等女学校、東洋高等女学校、淑徳高等女学校、東京女学館、女子高等師範学校、東京家政女学校、第一高等女学校の9校を列挙し、各校の献上品や記念植樹、祝賀会の予定について記している。

このうち東洋高等女学校では、校内に簡易図書館「さくら文庫」を設立する計画で、浄財の喜捨を仰ぐという。「文庫」を設ける計画は、ここではこの1校のみである。東京女高師は「単に式を挙げるに止どめ、十一月の創立四十年、独立二十五年記念式に全力を注ぐ計画で昨今寄り々々相談中です。」とある。

東京女高師では11月10日に教職員と生徒・児童・幼児が一堂に会して大礼奉祝式が行われたが[13]、11月29日には開校四十年分立二十五年記念式が挙行され、明治記念室も開室して、校長の中川謙二郎を中心に明治時代を顕彰し皇室を崇拝する気運が高まっていたので[14]、大礼に関する記念事業も含み込まれていたものと推測する。しかし、教職員と生徒の親睦組織である如蘭会の5月の総会で、協議事項の中に「御即位大典紀(ママ)念事業ノコト」という1項が挙げられているのを見ると[15]、やはり何らかの形で検討はされていたものと思う。

1916(大正5)年度の『東京女子高等師範学校・第六臨時教員養成所一覧』の「沿革」では、「(大正四年)十一月十日即位ノ大礼ヲ行ハセラレタルニ付此ノ曠古ノ盛典ヲ記念スル為大礼記念文庫ヲ設ク」と記し[16]、『六十年史』でも「大正四年十一月 今上陛下御即位の大礼を行はせられたにつき、記念の為、大礼記念文庫を設けた。」との1文を載せる[17]。開校四十年分立二十五年記念の一連の行事の中に、「文庫」や図書に関する情報は見出せず、大正の大礼記念文庫については、現在のところはこれ以上は不明であるが、この際にひとまとまりの蔵書群が用意された可能性もあると考える。

(2) 奈良女子高等師範学校の大礼記念文庫

奈良女子高等師範学校(以下、奈良女高師)では、大正天皇の大礼を記念して「大礼記念文庫」を設けた。東京女高師の例ではないが、参考までに触れておく。1915年5月から9月にかけて、しばしば評議会や教官会議で記念事業や奉祝行事について話し合い、記念文庫についても具体的に検討している[18]。5月の評議会で「御大礼記念事業ノ件」としてまとめられたのは、「皇室ニ関スル図書及御大礼ニ関係アル標本類ヲ蒐集シ、或ハ歴代ノ御親書ノ類ヲ印刷シ、額面トシテ掲ケ拝スルカ如キハ適当ナルヘシ、トモ角記念文庫ヲ設クルコトニ意見一致シ、委員トシテ水木、佐藤、蜷川、

吉田各教授指名アリタリ。文庫ト云フモ書籍戸棚ヲ造ル位ノコトナラン、一室ヲ専用スルカ如キハ不便ナルヘシ、一度ニ蒐集スルコトハ種々ノ点ニ於テ困難ナルヘシ、漸次ニ追集スルコト。」ということであった[19]。6月には職員・生徒の醵出金額が決められた[20]。標準額として、職員は月俸の100分の1以上、生徒は1人30銭である。

11月10日の当日には、講堂で奉祝式が挙行され、記念文庫が創設された[21]。「本校の大礼記念文庫、此の日を以て創設せらる。蔵書は多く本校職員生徒の寄贈になれり。」とある。大礼の記念事業であるから、皇室に関連する図書は当然のこととして、標本や親書類を印刷したものなど、書物だけでなくモノも集めようとする姿勢が興味深い。1つにまとめ、皇室に敬意を表する象徴的なスポットとして機能させようとしたのであろう。

昭和天皇の大礼記念事業

(1) 東京女高師としての記念事業

昭和天皇の即位の礼は1928(昭和3)年11月10日である。同年2月には、『読売新聞』が「御大典記念に図書館勃興 自然科学専門の女高師の計画」と題し、文部省が「教育上有益な事業」として各地に図書館建設を奨励し、東京女高師では「現在の附属図書館を大拡張して自然科学図書館に改め女子の自然科学知識の涵養に努める事に決定した」と報じた[22]。「自然科学専門の図書館は吾国では最初のものであらう」と結ぶが、この件に関してはその後の経緯が不明である。東京女高師に自然科学専門の図書館はできていない。

東京女高師では、9月に教官11名に大礼記念事業の準備委員が依嘱(ママ)された[23]。記念事業として計画されたのは、「新校地ニ記念植樹ヲナス事トシ職員生徒以下醵金シテ之カ費ニ充ツルコト」であった[24]。大塚の新校地が文部省から正式に交付されたのは、同年11月26日のことで[25]、大礼記念事業の進捗と新校地への移転計画はほぼ同時進行していたものと思われる。記念事業として新校地で新たに何か造ったり植樹したりするという発想は、ごく自然のものであったろう。11月には、「兼テ本校ニ於テハ大礼記念事業トシテ夫々計画ノ処、職員生徒ノ醵出完了、其額千百三十四円八十四銭ニ達セリ」と記録されている[26]。

「昭和三年 御大礼ニ関スル書類」[27]の中の「大礼記念事業ニ関スル件」を見ると、「一.植樹」項には、「本校復旧事業ノ進展ト共ニ新校地ニ植樹ヲ行ヒ永久ニ大礼ヲ記念セムトス」とあり、その費用として、本校・第六臨時教員養成所の職員・生徒・児童・幼児の醵出金の標準額が示されている。職員は「俸給又ハ手当月額ノ百分ノ一」、生徒・児童・幼児は「各金五十銭」で、本校と附設の臨時教員養成所、附属校園まで含め、東京女高師全体でこの事業に取り組んだことがうかがわれる。ここには、「醵出金合計壱千百三十四円八十四銭ハ当分ノ内之ヲ保管スルコトトシ、株式会社三井銀行ノ定期預金ニ預入手続ヲ了セリ」とある。この文書は1929(昭和4)年3月に文部省に対し、大礼に関して実行した諸事項を報告したものであり、その時点ではまだ新校地移転計画も端緒についたばかりで、植樹についても具体化できず、とりあえずまとまった金額を保管するに留めたのであろう。

ただし、この記念植樹がその後どのように行われたのか、管見の限りでは見出せずにいる。植樹されていれば現在に残っている可能性も大きいので、今後の課題として、学内の資料調査を進め明らかにしたい。

(2) 附属高等女学校の記念文庫

前述の記念植樹は東京女高師全体で取り組んだものであったが、それとは別に、附属高等女学校では独自に記念事業に取り組んでいる。「昭和三年 御大礼ニ関スル書類」の「大礼記念事業ニ関スル件」の「二.記念文庫」項に、その経緯が語られている。

「昭和三年五月最高学年生徒ノ発起ニ依リ、六ヶ月間ノ継続事業トシテ大礼ヲ記念スベキ計画ヲナシ、附属高等女学校職員之ニ賛同指導セリ」とあり、5月に最上級生から発案され、職員が賛同し指導したことがわかる。職員・生徒の醵出金総額は「金弐千弐百拾四円五拾銭」で、東京女高師全体で集めた金額の2倍ほどである。事業の内容として「記念事業ハ文庫ヲ作ルコトニ決定シ、其ノ図書ハ皇室ニ関スルモノ、我国家国体ニ関スルモノ、我国民道徳ニ関スルモノヲ主トシ、三月末日迄ニ文庫内ニ蔵セル点数壱千七百弐拾九点ニ及ビ、尚残金弐百弐拾円ヲ有スルヲ以テ、事業完結ノ暁ニハ図書ノ点数弐千点ニ及ブ予定ナリ。」と記す。

これによれば、翌年3月の段階で既に1700点以上の図書が集められ、まだ残金があった。附属高等女学校の校舎の建築は、寄宿舎、集会所、雨天体操場、附属幼稚園、本館及び講堂、図書閲覧室及び書庫、附属小学校が次々に竣工し、それぞれが段階的に移転していく中で、1935(昭和10)年3月に完成し、最後に移

転している。その過程で記念文庫設置が計画され、校舎の設計にその設備が盛り込まれたのであろう。

1928 年度の「年報」では、附属高等女学校の部で「大礼記念事業」項として、「生徒ノ自発的計画ニ成レル大礼記念事業トシテ生徒ハ六月ヨリ十二月ニ至ル六ヶ月間ニ (八月ヲ除ク) 金三円宛ヲ醵出シ、教官ノ指導ノ下ニ皇室、国家、国民道徳等ニ関スル図書ヲ蒐集シ、以テ大礼記念文庫ヲ設置シタリ。」と記されている [28]。附属高等女学校独自の企画として、「大礼記念文庫」が設けられたのである。大礼を記念するという趣旨により、図書の種類は皇室、国家、国体、国民道徳に関するものであった。

「大礼記念文庫」のその後

(1) 現在の様子

写真 1 は、1936(昭和 11) 年の『落成記念写真帖』に掲載された高等女学校の「書庫」の写真である [29]。「書庫」は校舎の 1 階で、読書室と隣接して配置されていた。

写真 1:「書庫」

ここに見られる天井までの高さで手すりが付いた二層構造の書棚が、「大礼記念文庫」として備え付けられたものである。

附属高等女学校の校舎は、そのまま現在のお茶の水女子大学附属高校に引き継がれており、上述の「書庫」は、現在は印刷室として使用されている (写真 2)。

文庫の図書は移動されているが、備え付けの書棚は当時のままである。書棚の上部には、「大禮記念文庫」の文字と、龍のレリーフが施されている (写真 3・4)。

各棚板の裏面には、本科 5 ～ 1 年生と実科 2・1 年生の全生徒氏名が墨書されている (写真 5)。この生徒達はそれぞれ 1929 ～ 33(昭和 4 ～ 8) 年の卒業生であり、1928 年 (昭和 3) 年 5 月に記念文庫設置が発案された時の在校生に当たる。生徒の発案・醵出によりこの文庫を設けたという経緯を銘記するためのものであろう。

筆者は過日、附属高等女学校 1930(昭和 5) 年 3 月卒業生にインタビューする機会を得た。1925(大正 14) 年 4 月の入学で、1928 年 5 月当時は本科 4 年生

写真 2: 現在の印刷室 (2010 年 12 月撮影)

写真 3:「大禮記念文庫」の文字

写真 4: 龍のレリーフ

写真 5: 棚板裏面の生徒氏名

である。おそらくいくらか醵出したであろうし、棚板に記名もされている。ところが、氏はこの「大礼記念文庫」について全く知らなかった。醵出金も記憶にない。氏が高等女学校の生徒として卒業まで過ごした校舎はお茶の水の仮校舎であり、1935(昭和 10) 年 3 月に完成した新校舎とは全く縁がなかったのである。写真 1 ～ 5 については「初めて見た」という返事であった。

すると、記念文庫を発案・醵出し、棚板に記名されている生徒達は全て新校舎に完成した「大礼記念文庫」を見ることはなかったことになる。記念文庫の設置が決まり、計画は実行に移されたが、生徒達はお茶の水の仮校舎で過ごしており、その時点で新校舎はまだ設計の段階であった。ちなみに新校舎の本建築が起工されたのは、1934(昭和 9) 年 7 月である [30]。

次に筆者は、附属高等女学校 1936(昭和 11) 年 3 月卒業生にも話を聞いた。入学は 1931(昭和 6) 年 4 月で、1 ～ 4 年生までをお茶の水の仮校舎で過ごし、5 年生になった 1935 年 4 月から大塚の新校舎に移った。氏に写真 1「書庫」を提示すると、隣の読書室とともに、書庫としてよく記憶されていた。しばしば利用したという。しかし、「大礼記念文庫」という存在、書棚上部の文字や意匠、棚板裏の記名等は全く認識しておらず、学校側から特に説明もなかったそうである。

(2)「大礼記念文庫」の図書

附属高等女学校の蔵書について現在知ることができる図書目録は 2 冊ある。『東京女子高等師範学校附属高等女学校校友会図書目録』の「昭和七年十月現在」版と、「昭和十三年二月現在」版である [31]。「凡例」によれば、この『図書目録』は校友会図書部が発行し、会員に 1 冊ずつ配布したもので、図書部は 1929(昭和 4) 年 4 月に設置され、同年 6 月に読書室が開かれている。蔵書数は前者が「参千百余冊」、後者が「殆ど四千三百冊」とある。

校友会図書部が設置され、読書室が開かれた時期は、お茶の水の仮校舎の時代ではあったが、既に大礼記念事業として関連図書が 1700 点以上購入されているので、それを保管し、活用する体制が整えられたことを示す。

さらに「凡例」には、「大礼記念文庫」について言及する 1 項目がある。「一、購入図書中注目すべきものは、『大礼記念文庫』で、前主事故齋藤文蔵先生が専ら蒐集、整理に当られた一大文庫で御座います。」と記す。齋藤文蔵は 1928(昭和 3) 年 3 月～ 1930(昭和 5) 年 11 月に附属高等女学校主事を務めており、同校の大礼記念事業の計画と遂行の中心的役割を担った人物であると思われる。また齋藤は、東京女高師教授として、第 3 章で述べた大礼記念事業の準備委員にも依嘱(ママ)されている。

『図書目録』では、まず「一 修身・哲学・教育」から「十三 辞典」まで、13 の分野別に書名と著者名が記される。この部分は、「昭和七年」版から「昭和十三年」版で、冊数が大幅に増えている。次いで、「大礼記念文庫」として、「第一門 明治天皇」から「第二十四門 別置図書」まで、同様に書名と著者名が記される。ここに、そのカテゴリーを列記する。

1 明治天皇、2 昭憲皇太后、3 大正天皇、4 皇太后陛下、5 天皇皇后両陛下、6 伊勢神宮、7 歴代、8 皇族、9 宮内省出版・蔵版図書、10 即位礼及大嘗祭、11 勅語・勅諭・詔書等、12 帝都、13 国旗、14 神道、15 国体・政体、16 国民性・日本精神、17 武士道、18 国民道徳・修養・教育、19 国史 (社会) 国文、20 婦道、21 忠良賢哲、22 東洋思想・欧米思想、23 辞典・叢書、24 別置図書

即ちこれらが、「皇室、国家、国民道徳等ニ関スル図書」として蒐集されたものである。リストアップされている図書の総点数は、「昭和七年」版で 1412 点、「昭和十三年」版は 1413 点で、第 24 門の最後の 1 冊しか増えていない。基本的に「大礼記念文庫」として完結していたのであろう。

なお、1939(昭和 14) 年 7 月に、「青少年学徒ニ賜ハリタル 勅語ノ聖旨奉体ノ実践的具体案」として附属高等女学校が挙げた中に、「生徒読書室ニ国体ニ関スル図書、古今ノ忠臣、孝子、貞女、節婦等ニ関スル図書ヲ蒐集シテ生徒ニ閲読セシム」という 1 項目が

ある[32]。読書室に備えたとあるし、書庫の「大礼記念文庫」とは直接の関係はないように思うが、時局柄、共通するカテゴリーも多く、「大礼記念文庫」も戦時下の教育に何らかの形で活用された可能性はあろう。

戦後、いつの時点かは不明であるが、「大礼記念文庫」の図書は一括して、目録カードと共に、附属高校からお茶の水女子大学附属図書館に移動され、現在は附属図書館で保管されている。行方が不明の図書もあるが、ひとまとまりの蔵書群としてそれを眺めると、大礼を記念してこれらの図書を蒐集した当時の教育思想がうかがわれ、興味深いものがある。

おわりに

以上、東京女子高等師範学校における記念文庫の例を見てきた。文部省が「教育上有益な事業」として図書館建設を奨励したことにも表れているように、図書館や文庫を設けるということは、学校教育においては大変馴染みやすいものであったと考える。記念事業としては、その他に記念館の建設や記念品の製作といった例が見られるが、文庫は非常に設けやすかったのではないか。まとまった金額を使用でき、現物が目に見える形で残り、将来にわたり生徒の教育上に活用されうるということで、醵出した人々にも納得してもらえるからである。

また附属高等女学校の「大礼記念文庫」では、書庫であった部屋と当時の戸棚が現在も残っていることに注目した。在校生にはあまり認識されていなかったようであるが、校舎の歴史として見ても興味深く、大学史にとって貴重な実物資料でもあるので、老朽化が進む中で、保護・保存が検討されるよう希望する。

注

1) 東京女高師『東京女子高等師範学校六十年史』(以下『六十年史』)1934年10月、61頁、「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会『お茶の水女子大学百年史』(以下、『百年史』)1984年5月、667頁。
2)『六十年史』100頁。
3) 東京女高師「日誌」1904年11月29日条、お茶の水女子大学歴史資料館蔵。
4)「日誌」1907年5月31日条。
5)『百年史』85頁。ただし、「東京女子高等師範学校沿革大要 其二」(1913年、お茶の水女子大学歴史資料館蔵)では、講堂について「明治三十五年三月卅一日自修(ママ)室即チ講堂ノ増築工事成レリ、講堂ハ明治三十二年三月廿八日新築セラレタルモノニシテ、建坪百四十坪ヲ有シ可ナリ大ナル講堂ト思ハレシカ、尓後数年間ニ於ケル本校ノ膨張ハ茲ニ再ヒ増築ノ必要ヲ感シ、更ニ百二十坪ヲ増シテ合計二百四十二坪ノ大講堂トナレリ」として、『百年史』の記載とは齟齬がある。東京女高師『東京女子高等師範学校沿革略志』1915年11月、71頁の、「(明治)三十二年三月講堂を新築す。其の建坪百四十坪。三十五年三月三十一日講堂を増築し、自修(ママ)室に兼用す。其の建坪合せて二百四十二坪なり。」という記載は、「沿革大要」に基づくものと思われ、事実関係についてはさらに検討する必要がある。しかし1907年当時の自習室が講堂と兼用であったという本稿の論旨には直接関係しないため、ここでは齟齬があることを指摘するに留める。
6)『六十年史』115頁、『百年史』668頁。
7) 東京女高師『東京女子高等師範学校一覧 自明治四十四年四月至明治四十五年三月』1911年11月、「東京女子高等師範学校沿革大要 其二」。
8)『六十年史』189頁。
9)『百年史』671頁。
10) 東京女高師『校報』第521号、1940年2月17日発行。
11)『百年史』670頁。
12)『読売新聞』1915年10月15日朝刊。
13)「日誌」1915年11月10日条。
14) 拙稿「東京女子高等師範学校の「学校博物館」(『全国大学博物館学講座協議会研究紀要』第7号、2002年3月)。
15)「日誌」1915年5月6日条。
16) 東京女高師『東京女子高等師範学校・第六臨時教員養成所一覧 自大正五年四月至大正六年三月』1916年10月。
17)『六十年史』133頁。
18) 奈良女高師「教務日誌」1915年5月4日、6月19日、6月22日、7月3日、9月10日条、奈良女子大学附属図書館蔵。
19)「教務日誌」1915年5月4日条。なお、「評議会・教官会議記録」(1914年6月～1919年9月、奈良女子大学附属図書館蔵)にも同文が記録されている。
20)「教務日誌」1915年6月22日条。
21) 奈良女子高等師範学校校友会『養徳』第6号、1915年12月、111頁。
22)『読売新聞』1928年2月14日朝刊。
23)「日誌」1928年9月20日条、『校報』第90号、1928年9月22日発行。
24)「東京女子高等師範学校昭和三年度年報」、お茶の水女子大学歴史資料館蔵。
25)『六十年史』187頁。
26)「日誌」1928年11月8日条。

27) お茶の水女子大学歴史資料館蔵。
28) 注 24 に同じ。
29) 東京女高師『落成記念写真帖』1936 年 11 月、お茶の水女子大学歴史資料館蔵。
30)『六十年史』241 頁。
31)『東京女子高等師範学校附属高等女学校校友会図書目録』「昭和七年十月現在」版はお茶の水女子大学歴史資料館蔵、「昭和十三年二月現在」版はお茶の水女子大学附属高校蔵。
32)『校報』第 501 号、1939 年 7 月 1 日発行。

2011 年 2 月 13 日　受稿